

大阪・関西万博におけるパビリオン等地元出展に関する
有識者懇話会 第4回 議事概要（メモ）

■日 時：令和2年6月16日（火） 14時00分～15時40分

■会 場：大阪府庁本館 1階「第1委員会室」

■出席委員等：※敬称略。五十音順。所属、職名は開催当時。

【委員】

<会場参加>

佐久間 洋司（大阪大学学生 人工知能研究会/AIR 代表）

澤田 祐二（UG WORK 合同会社 代表/プロデューサー）

鈴木 裕子（株式会社 Office musubi 代表取締役）

遠山 正彌（地方独立行政法人大阪府立病院機構 理事長）

Nigel D. R. Simpson（公益財団法人大阪観光局 大阪観光アドバイザー）

西澤 良記（公立大学法人大阪 理事長）

橋爪 紳也（大阪府立大学研究推進機構特別教授 大阪府立大学観光産業戦略研究所長）

森下 竜一（大阪大学大学院医学系研究科 寄附講座教授）

<Web参加>

東 博暢（株式会社日本総合研究所 リサーチ・コンサルティング部門 プリンシパル）

巽 樹理（追手門学院大学 社会学部 准教授）

【特別アドバイザー】

<Web参加>

高橋 政代（株式会社ビジョンケア 代表取締役社長）

つんく♂（音楽家 総合エンターテインメントプロデューサー）

【オブザーバー】

<会場参加>

高見 明伸（2025年日本国際博覧会協会企画局審議役）

楠本 浩司（大阪商工会議所地域振興部部長兼万博協力推進室長）

壺井 秀一（関西経済連合会産業部マネージャー）

<Web参加>

武田 家明（経済産業省商務・サービスグループ博覧会推進室長）

【発言要旨】

≪吉村知事≫

委員の皆さん、それから特別アドバイザーのつんく♂さん、そして高橋先生におかれましては、本当にご多忙のところ本懇話会に出席いただきまして、感謝申し上げます

思います。皆さんありがとうございます。

コロナに関しましては緊急事態宣言が解除されまして、休業要請も段階的に解除し、今、社会経済活動を取り戻しながらも、このウイルス対策をやっつけよう、ウイルスとの共存の毎日を図っているというところでもあります。万博においても「いのち輝く未来社会のデザイン」ということなので、コロナを乗り越えた、コロナに打ち勝つ万博というのをぜひ実現したいと思っていますし、大阪の地元のパビリオンというのを世界に誇るものを作っていきたいというふうに思っています。

地元パビリオンを良くしたいという皆さんの強い気持ちに感謝申し上げるとともに、我々自治体としても全面的に進めて参りますので、今日は忌憚のないご意見をお願いしたいと思います。

今日は基本的なテーマとそれから出展構想のたたき台というところを、皆さんにご議論いただきたいと思っておりますので、大阪を明るく元気にしていくためにも、ぜひよろしくをお願いします。今日はありがとうございます。

《松井市長》

本日は委員の皆さんにはご多忙のところ、ご出席を賜り誠にありがとうございます。今回で4回目の懇話会となりますが、これまで委員の皆様や、特別アドバイザーの皆様からいろんなアイデアのご提案をいただき、大変感謝しております。

本日は出展参加のテーマをご決定いただき、ほか、出展参加の基本構想につきましてご議論をいただく予定であります。この基本構想は出展の根幹となります重要な構想ですので、これまで以上に皆さんの忌憚ないご意見、活発なご議論をよろしく願いいたします。

《事務局》

それでは議事の方に入りたいと存じます。ここからは座長の西澤委員に進行をお任せいたしたいと存じます。西澤座長よろしく願いいたします。

《西澤委員》

西澤でございます。どうぞよろしくお願い申し上げます。

前回の懇話会におきましては、鈴木委員、つくくみ特別アドバイザーからパビリオンの出展に関する具体的なご提案をいただきました。

また、これまでの委員等のご意見、あるいはご提案、そういった趣旨を踏まえまして、出展基本構想の核となります出展目的、あるいはテーマを中心に意見交換をさせていただきました。各委員の提案の概要につきましては、参考資料として配付いたしておりますので、こちらをご覧くださいいただければと思います。

本日は先ほども知事・市長からお話ありましたように、前回に引き続きまして、出展参加テーマそして、出展参加基本構想について、意見交換をしたいと思っております。方向性

を固めていきたいと思っておりますが、委員の皆様におかれましては、本懇話会の円滑な進行に御協力を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

それではまず、議題の第1にあります出展参加テーマにつきまして意見交換を行いたいと思います。前回、出展参加テーマにつきましては、「REBORN」というのを基本にするということを検討させていただきました。その後、皆様からいろいろご意見をいただき、それを踏まえまして事務局で内容を整理させていただきました。その整理につきまして事務局からご説明をお願いしたいと思います。

《事務局説明（今後の検討の論点・出展参加テーマについて）》

それでは事務局の方から説明をさせていただきます。まず初めに資料3をご覧くださいと存じます。

初めに今後の検討の論点に触れさせていただきたいと思います。前回3月31日に開催いたしました第3回有識者懇話会後の状況の変化といたしまして、新型コロナの世界規模でのパンデミックは、経済活動や健康、社会秩序といった様々な面で大きなインパクトを与え、今後の社会への影響を見据えたWithコロナ/Afterコロナということで、社会構造や人々の生活様式の変革に繋がるとの見解がある一方で、否定的な見解もございます。

本懇話会におきましては、今後の社会の変容の実態、あるべき方向性にも思いを致しつつ、あわせまして、ドバイ万博1年延期ということも踏まえまして、出展のあり方について検討を進めてまいりたいと存じます。

検討における課題を記載してございますが、「出展参加テーマ」につきましては、適切なメインテーマの設定や、サブタイトルのあり方、「出展参加基本構想の文案」につきましては、新型コロナウイルス禍における、国内外の社会情勢を踏まえた文案の整理ということのポイントとしており、このあと事務局の案をお示しさせていただきたいと存じます。

出展内容以下の項目につきましては、本日の次第（3）のその他の項目のところで事務局の考え方をご説明させていただきますので、よろしくお願いいたします。それでは次の資料をご覧ください。

資料4の出展参加テーマにつきましてご説明をさせていただきます。出展参加テーマにつきましては前回の会合でREBORNを基本に、事務局で整理することとなっておりますので、この間、一旦内容を整理いたしまして、委員の皆様個別にご意見をお伺いさせていただきましたところ、メインテーマをREBORNとし、サブタイトルとは分けて考えた方がよいとの意見が大勢でございました。資料では、REBORNをメインテーマとすることを前提に、言葉の説明として、解説の文案を整理させていただいております。このテーマには、「人は生まれ変わる」、「新たな一歩を踏み出す」という2つの意味を込めております。

そのような形で説明をさせていただいておりまして、「人は生まれ変わる」、これは大

阪・関西万博を機に、自分らしい生き方を改めて見つめ直すことで、自分自身の価値観や生きがいの発見、再認識、自己実現への意欲、意識の変革を促し、新たな自分への生まれ変わりについて貢献する取り組みを展開できればというものであります。

「新たな一步を踏み出す」これは家族の一員として、地域の一員として国民として、地球市民として今自分に何ができるかを再認識し、一人一人の意欲、意識の変革が具体的な行動変容へと繋がり、よりよい生活環境、暮らしやすい社会づくりに貢献し、「いのち輝く未来社会」に繋げていければというものであり、このように、REBORNに2つの意味合いを込めております。

なお、サブタイトルにつきましては、下段にいくつか委員の皆様からもいただいた例などを記載してございますが、今後の出展内容等の検討を進めていく中で、メインテーマを補足すべき事柄の有無なども踏まえ、ご意見を賜りながら、引き続き検討してまいりたいと考えております。出展参加テーマについての説明は以上でございます。

《西澤委員》

今、事務局からご説明がございましたように、出展参加テーマってというのは、REBORNということを中心を主題に置き換えということで、その意味としては、人は生まれ変わる、あるいは新たな一步を踏み出すといったような意味を込めたいということでございます。

この件についてご意見をいただきたいと思いますが、いかがでございましょうか。

《シンプソン委員》

非常に良い英語ですね、そのタイトルに関しては。もうぜひ、これからいろいろ検討の中で、お役に立てればいいなと思います。

今のサブタイトルの、英語の方は、もう少しちょっとブラッシュアップする必要があるのではないかなと、これから検討していくに当たっては、ぜひ力になればいいなと思います。

《西澤委員》

ありがとうございます。

何か他にございますでしょうか。

これシンプソン委員に聞かせていただきますが、REBORNってこれは形容詞ですよ。名詞ではないですよ。

《シンプソン委員》

そうですね、名詞じゃないですね。

《佐久間委員》

これは質問になってしまうのですが、環境とか、自然もまた命であるみたいな文脈のお話も前にあったと思うのですが、REBORNの生まれ変わりっていうのは、あくまで人が生まれ変わるということなのか、もう少し広い文脈で生まれ変わりというお話なのでしょうか。

《西澤委員》

そういうお話、ご意見ございました。環境とかそういう意味ですね。自然とか。

《シン普森委員》

英語的には全部含まれるわけですね。日本だけじゃなくても社会にしても、まさに今この2ヶ月半で考えると、本当に世界も生まれ変わりつつある中でも、英語的に言えば全部含まれるわけなので、非常に最適な言葉だと思います。

《橋爪委員》

テーマは「REBORN」で良いと思うのですが、「REBORN（リボーン）」というカッコ内のカタカナ表記は、このまま使われると格好悪いと思います。ですので、この「REBORN」に値する良い日本語があればと思います。あるいは、英語の「REBORN」だけでも十分かと。

《西澤委員・シン普森委員》

おっしゃる通り。

《橋爪委員》

私が第一に思うのは、前の資料にあった「大阪の力を結集」という点です。ホスト都市のパビリオンとなるので、世界に対して大阪は素晴らしい街だとか、大阪人はこのような特徴があるということを強く出さないと、多数のパビリオンの中で、大阪館が魅力的に見えないと思います。ですので全般に、大阪の力を結集するというか表現が、さらに強調されて良いと思います。

2025年大阪・関西万博の誘致案を検討していたときに、事務局が大阪弁に書き換えた博覧会の趣旨を示された。その資料が品の良い大阪弁ではなく、とてもじゃないけど、これは大阪人として許せない表現のある、東京から見た大阪弁の文案がでてきた。委員会の中で他の東京の人はみんな褒めるのですが、私だけはこれはおかしいと強調、松井市長に取り下げてもらうように発言いただいたという苦い経緯があります。

要は、外から大阪がどう見られているかという現状追認ではなく、私たち自身が大阪をどのように対外的に打ち出したいのか、今回の懇話会ではきっちり意識しながら、進めないといけません。ぜひ「大阪の力を結集」というニュアンスを全体に通底させていただければと思います。

《つくみ特別アドバイザー》

メインタイトルとサブタイトルの意味が被っていていいのですよね。

《西澤委員》

つくみさんからのご意見は、そのテーマとサブタイトルは類似性があるって、そういう意見ですか。

《事務局》

これはメインテーマを補足するような意味合いを持たず、サブタイトルということを考えていく必要があるかなと思っています。今後、このメインテーマがREBORNとすることでいくなれば、具体的な項目を検討していく中で、ふさわしい言葉を入れていきたいなど。サブタイトルについてはご検討いただければというふうに考えております。

《西澤委員》

もう少し具体化してからということですね。多分、中身のね。

《森下委員》

「REBORN」というタイトル自体は非常に良いと思います。今回は、先ほど環境の話が佐久間委員から出ましたけども、社会システム全体でやはり「REBORN」というのは今回、大きい意味になると思うのです。

オンライン診療やオンライン会議とか、非常に今回のネットを使った距離感っていうのが従来とは、比較にならないくらい変わってきた。そういう意味での社会システム全体がかなり今回、変容していくという状況だと思っていますので、単純にその何か1つのテーマというよりももう少し幅広で考えてもいいのかなと意見いたします。

その中でサブタイトルに関してですけれども、これもちょっとキャッチーなのが欲しいかと。サブタイトルであまりにも一般的なやつが多いので、ここはもっとこの会場に行きたいということが出るような刺激的なタイトルというのをつけた方がいいのかなと。「REBORN」というメインタイトルは結構刺激的なのですが、サブタイトルに行くと急になんとなく、ありふれた言葉になっているので、ちょっと面白くないかなという気がします。

《西澤座長》

サブタイトルはこれからさらにご意見いただければと思います。

《つくみ特別アドバイザー》

メインテーマは抽象的であっても、サブタイトルはしっかり意味合いがあるもの、方

向性を伝える内容が示されているべきかなと思いました。ということで今の説明はメインテーマが今後もっと変わるって意味ですか。

《事務局》

メインテーマは変わる予定はございません。そういうことでよろしくお願いたしません。

《西澤委員》

森下委員がおっしゃったことと、それから佐久間委員がおっしゃったことと、ちょっと類似性が高いのですけれども、この「人は生まれ変わる」のは、これは人についてですよ。

2番目の新たな一步を踏み出すっていうのは、新たな社会に一步を踏み出すとか、全体を含みますよね。そんな表現の方が、人間のことだけ言っているように聞こえるので、もし何かいい案があれば、そういった形でということによろしいですか。

《澤田委員》

サブタイトルという言い方ですけど、サブタイトルだとメインタイトルがある意味になります。普通は、「メインテーマ」に対して「サブテーマ」という言い方が正しいと思います。メインテーマがREBORNで、その内容についてサブテーマでいくつか示す。

その場合の機能としては、つくみさんがおっしゃっている通りで、具体との接点を示すことが機能で、今後いろいろな方が参加してくるときに「私はこのサブテーマと繋がれるので参加する」ということや、具体的展開の方向性について示すことがいいと思います。原案のメインテーマを別な言い方で言い換えることについてはあんまり意味がないと思いますので、今後、具体的展開を検討する中で、3つ程度のサブテーマを立てられるのが良いのではないかと思います。

《遠山委員》

サブテーマでの話と思いますが、そのサブテーマをまたブレークダウンしてテーマ展開することになりますので、具体化っていうのはちょっと階層的な話なので、それはまた事務局で検討いただければいいと思います。

《西澤委員》

現時点で決めるということではないですよ。

《吉村知事》

さっきの話だと、人は生まれ変わる、人だけじゃなくて例えば社会とか環境だとか

という意味があるのだからということであればですね、ここは解説に「人は生まれ変わる」となっていて、2つ目が新たな一步を踏み出すってなっているのですが、ここを例えば社会は生まれ変わるとか、何かREBORNに繋がった方がわかりやすいのじゃないかなという気がします。

また「新たな一步を踏み出す」という事は悪くはないのですが、そことREBORNでどう繋がってるのっていうので、「生まれ変わる」っていうので繋がった方が、中の文案の文脈はそんなに変わらないと思うのですが、社会づくりに貢献するとか、いろいろ書いてるので、生まれ変わりというのはテーマとして、そこを本質にして、その周りの肉づけみたいに考えた方が、もとの解説としてはいいんじゃないかなと思うんです。これ、意見ですけど。

《西澤委員》

ありがとうございます。先ほどから出ている意見の集約的な感じになってくるのかなと思いますけれども。

《つんく♂特別アドバイザー》

ちなみに意味合いとしては、この「REBORN」は、大阪は？日本は？世界は？未来は？今の段階で、誰に対しての「REBORN」と捉えておくべきですかね。

《西澤委員》

取り方によってはどれにでもとれるということですよ。鈴木委員どうでしょうか。

《鈴木委員》

一人一人が、っていう基本的にみんな生まれ変わりの意識を持っていかないと、もとは環境が戻らないであろうということなので、基本全員。そういう意味では、大阪の人も日本も世界も変わっていくためのメッセージをこの大阪館から発信して、みんながなるほどと思えるようなことを作っていきましょうという認識です、私は。

《松井市長》

先ほどちょっと話ありましたが、この「REBORN」っていう英語は、日本語にしたらどういう言葉になるんですか。変わる？再生？そこがわからないと、何を指してるのと、いうところで。「再生」という意味であれば、生まれ変わるというものもあるんですけど。これは森下先生が今担当でいろいろやってもらっている、若返るといふか機能を維持していくとか、それから、医療関係者の皆さん、みんながやってくれている難病どう克服するとか、そういうことに繋がっていくのですが。私はリアルなところではやっぱりそういうものを、万博の大阪の力を使って世界の人に提供していくのが、大阪館の役割ではないかなと。

そういうことで、万博の大きな全体のテーマである「いのち輝く未来社会」に繋がるのかなと思っているんです。

「REBORN」は再生という意味で捉えていくのかどうか。私はそう思ってるんですけどね。そういうふうには、皆さんと、意識の共有が必要かなと思います。

《つんく♫特別アドバイザー》

では、一緒に！とか、みんなで！っていう意味ですね。BORNにREがついてるんですね。

《遠山委員》

やっぱり「REBORN」という言葉は、かなり幅広いと思うのです。ですから、そこを本当に幅広く使うか、それこそ緑の再生であるとか、環境の再生、社会の再生であるというふうには絞っていくのか、その中でも大阪の特徴のある「REBORN」に絞るのか、そのところを明確にしないと、非常にバラバラになってしまって、何か意識っていうかメインの感じがはっきりせずに、ぼやけてしまうような感じがするんですね。

逆に絞りすぎたら、なんやという感じになるので、その難しさはあると思うんですけど。

そのところ、どこらへんまで広げていくのか、ホストとして、ホスト館としてそのところもやっぱり広がりというのはある程度決めとかなないと、非常にバラバラになってしまうような感じを受けますね。

《松井市長》

今の遠山先生の話、私も全くそう思ってます、広げすぎると、これちょっと総花的にわかりにくくなる。

これは大阪・関西万博なんですけども、日本万博なので広げる役割は、やはり政府館、日本館が広げると。我々は地元自治体として、やはり絞る中でより来ていただいた人は、大阪館はこういうことだと、ちょっと絞った形で、来た人がすぐに何の目的でやっているかがわかる。その方がいいと思うんです。

他にもパビリオンはたくさんあるわけで、各国パビリオンも出てきます。広いテーマは日本館、政府館がやるので、大阪館はやっぱりその中でもリアルな体験ができる。そういうものが求められるのではないかと考えています。

《事務局（メインテーマに対してのサブテーマの補足説明）》

テーマのREBORNについて説明させていただいているのですが、この後の構想のたたき台のところではテーマ展開等についてもあるんですが、これまでの議論の中で、パビリオンでいろいろ見て体験していただいて、出てきたときに人の気持ちが変わっている、そういうところで次に向かって、生まれ変わるといいますか、意識を変えていって

行動変容に繋げていこうというのがこれまでの議論であったと思うのですが、そういったものを「REBORN」という言葉で示させていただいております。
ですので、このメインテーマというのに対してサブテーマっていう中で、どういう方向性を見せる言葉を示していくかっていうことになるかと思うのですが。

《つんく♫特別アドバイザー》

Born To Be Wildの置き換えじゃないけど、REBORN To Be GENKI!とかね。笑。

《澤田委員》

今の市長の意見に賛成と言っちゃあ失礼なんですけれども、博覧会にはいろんな立場でいろいろな出展や参加が出てきます。私はこれ見たときに、もう大阪は「人」というものを主眼に展開するのだと理解したのです。それをいろいろ変えていくとテーマ館とか政府館とか、被ってしまうので、非常にぼやけてくると思いますね。

逆に言うと今、大阪の自治体館が「人」を中心に考える。と言えば、他が逃げていく、逃げてくっていうのはおかしいですけども、仕分けがついてくるので、私はもうこの「人」ということに注視して、自然も人から見た自然って言った方がよくて、だから自分がどう変わるか、自分がどうやって健やかでいるか、という「自分に問いかけるパビリオン」というふうにした方が私は非常にはっきりすると思いました。

《西澤委員》

なるほどね、そういう意味では新しい社会での自分はどうあるべきかとか、そういう意味でとっていけばいいのですね。要するに、オンラインの生活になっていても自分はどうかというような表現を使えば、それは環境を示すことにもなりますね。

《遠山委員》

今、おっしゃった通りだと思うんですよね。我々、少しいろんな関係者と話をしてみると、大阪館で扱うのか、それとも他で提供していくのか、非常に迷われている先生がたくさんおられる。例えば、再生医療なんかでもそうですけども、どっちに参加したらいいのかと、大阪の持っているものを見せたいけども、やっぱり大阪なのか、それとも全国なのか、企業館なのか、そのあたりがみんな行き来してるんですよね。

私には再生医療はあまり関係ないんですけど、こうやって人工の心臓ができますよというふうに直に触ってみるとか、人工臓器はこんなですよとか。あるいは、これで体が治っていくのですよ、というようなある意味、目で見て触れて、そして体が再生していくという。私は、出来たらそういう日本館とかじゃなくて、大阪でやってほしい。そういうランドマークをはっきりすれば、かなりの人がそれに向かって集まってくれると思うので、あまり曖昧になりすぎても、ここへ、いい知恵と材料は出てこないような気

もしますけどね。

《高橋特別アドバイザー》

今、遠山先生から「REBORN」が再生医療にも繋がっていくのだというイメージを聞きまして発言させてください。日本は世界の再生医療の一つの集約地と見られていますし、再生医療学会の理事長のおられる阪大は日本の再生医療システム作りの集約地です。ですので、日本全体というよりもこの関西の地は実際に研究だけでなく治療ができる地域なのだというイメージを戦略的に出すためにも、ここは、ぜひ大阪館で扱っていただきたいなという気がいたします。

《シン普森委員》

皆様と、違ひまして、(REBORNは)自分の母国語だからそんなに違和感ないんですよね。ずっと入っちゃうんですよね、多分日本人にすれば、こういう議論になるだろうと思っています。

どちらかという、本当に皆さんおっしゃっているとおり、次のサブテーマ、本当に決まってきたら、その英語のキャッチコピーまでもその「REBORN」と繋がってないと英語的にすごいずれちゃうので。何て言うのですか、複雑な議論でない、英語的にはね。すごいずっと入ってくる、外国人としてはね。そのあたり、本当に次のサブテーマが日本語で決まれば、多分もうちょっとわかりやすくなるのではないかなと。

特に日本もこれから5年後、技術、ITも絶対REBORNされてるはずでしょうし、社会もそうですし、人間もそうですので、非常に幅広いと思いつつ幅広くないのですよ。そういう意味ではもう本当に5年後、いろいろ考えると、対応しやすい英語になっていると思います。

《森下委員》

REBORNを再生と言っていたら、再生のいわゆる日本語の再生だとなり、そういった意味が狭くなるわけです。そういう意味では、政府館の方でもライフサイエンスが1つ大きなテーマ館に入るので、再生医療全体は多分そっちに出るので、大阪府市館ですとすればかなり関西に特化した何かメリットがはっきりするような、キャッチーな展示が1つあると非常に良いだろうと思います。一方でやっぱり再生という日本語を使ってしまうとちょっと意味が限定されるので、漢字でもうちょっといい漢字があればいいんですけど、そういうイメージをもうちょっと広げたほうがいいかなと思いますね。

《つんく♂特別アドバイザー》

皆で統一する見解としては、「私は、(我々は) REBORNするとき(べき)だ。」という意味の「REBORN」として進めていけばいいですね。

「みんなでREBORNしよう！」というよりも。

それからもう1つ、サブテーマは日本語で決めた方が良いと思っています。

《西澤委員》

私もさっきは森下委員がおっしゃったように、ちょっともうちょっと何か、いい言葉があればいいなと。いい漢字というか、なんかありそうな感じはするんですけど、私たちはちょっと出てこないんですけど。

《吉村知事》

さっき、いろいろな範囲の中に「REBORN」という意味に、環境とかいろんなものが含まれている、だったら社会を生まれ変わるっていうこの新たな一步を踏み出す、そんなのが良いのじゃないですかって言ったのですけれど、やっぱりテーマどうするのって考えたら、私もやっぱり絞り込んだ方がよいと思うんです。

環境とか社会とかも非常に大事ですけど、あんまり広げると、大阪館の意味がなくなってきますし、大阪館として突き抜け感がやっぱり要ると思うんです。他の館にはない。だから、やっぱりそこは人に絞るべきだし、人の中でも、ある意味大阪の強み、関西の強みっていうのは再生医療なんかもすごく強みがあって注目をされているのだったら、それを使って。見せ方とかはいろいろあると思いますが。

当初、森下先生とか山中先生とかにお話したんですけど、iPS細胞で心臓を作れないのですかとか、ものすごい素人的な話なんですけど、そんな提案をしたこともありました。そういう大阪でしかできない、大阪・関西でしかできない突き抜け感みたいなものが、いるのではないかなと。だからテーマも広げるのではなくて、市長もおっしゃっているように、狭めて、そのために人が集まるっていう明確なものにした方が、他との差別化もできて、大阪・関西の魅力も発信できて良いのじゃないかなと思うんですけど。

《西澤委員》

ありがとうございます。知事がだいぶまとめてくださったように思います。1つはやはり最初に基本あったように、「REBORN」というのは人をテーマの中心にしながら、これから先もう少し中身を考えていくということで、サブテーマも考えていくということでよろしいのかなと思いますが、特に追加することはございませんか。

そうしましたら、出展テーマについては「REBORN」ということで、決定していきたいと思います。それで、サブテーマにつきましては、パビリオンの内容の具体化を踏まえながら、今後改めて議論をしていくということにさせていただきたいと思います。よろしく願い申し上げます。

それでは2番目の出展参加基本構想につきまして意見交換を行いたいのですけれども、2005年の愛知万博の際の愛知県館の出展基本構想を参考に、大阪府・大阪市出展参加基本構想のたたき台の文案を作ってくださいましたので、事務局から説明をお願いし

ます。

《事務局（大阪府・大阪市出展参加基本構想の概要説明）》

それでは資料5をご覧ください。出展参加基本構想のたたき台ということで次のページに出展参加の骨格となる、目次として1から9までの項目出しを行っております。

参考として、右には愛知万博の際の愛知県館の出展基本構想の目次を記載してございますが、特にこれまでの有識者懇話会での議論の中で、出展参加の意義は非常に重要だということでご意見をいただいておりますので、1項目目に出展参加の意義を加えております。本日はこれまで3回の懇話会でのご意見を踏まえまして、一定整理できる1から4までの文案についてお示しをさせていただきたいと考えております。

初めに、1の出展参加の意義でございますが、前段には、現状認識と、大阪・関西万博の本体の理念を記述いたしまして、中ほどに、2020年というところからですね、現在の新型コロナウイルスの影響と、社会の変化やQOLの向上が遡及されていることについて記述をさせていただきました。そして後段には、大阪が新たな社会システムや産業、製品等数多く生み出してきたことや、民の力が社会を支える仕組みも、大阪発で発展したことなどに触れまして、こうした大阪のポテンシャルは大阪・関西万博のテーマを実現していく上でも、なくてはならない知恵と技術力、行動力であるということ述べ、そうした大阪のポテンシャルの世界的なアピールや、魅力発信、そして新たなイノベーションの創出やQOLの向上、ひいては大阪の都市としての成長発展に寄与することを意義として記述をさせていただきました。

次の2の出展参加で目指すものですが、ここにはオール大阪の知恵とアイデアを結集させ、訪れた人々が命や健康、近未来の暮らしを感じられる展示を実現するとともに、大阪という都市の活力、魅力を世界のより多くの人々に伝えていくこと。

そして開催都市として、SDGs先進都市の姿を明確にし、新たな取組みの創出を図り、SDGs達成目標の2030年以降を見据えた取組みを世界に発信していくこと。

そして来場者が体験や共創を通じて、深く心に記憶されることをめざし、次の取組みを実現するとして、前回の会合でもお示しをしておりますが、「世界に貢献する大阪の姿を示す」ということと、「大阪のパワーを世界に発信」という2つの観点から取組みについて記述をさせていただいております。

まず(1)の「世界に貢献する大阪の姿を示す」これは展示よって生活の質QOLを向上させる展示を行う、あるいはSDGs達成に貢献する姿を示す。

もう1つが未来社会のモデルを提案するという3つの項目で文案の整理をさせていただきました。

(2)の「大阪のパワーを世界に発信」これにつきましては、イベントや催事によって、世界中からのアクセスを実現する、あるいは大阪の魅力を世界に発信という2つの項目で整理をさせていただきました。

3の出展参加のテーマにつきましては、先ほどご説明いたしました解説の文案を記述

しておりますので、説明は省略させていただきます。

最後になりますが、4のテーマ展開の視点ですが、我が国では、人間中心の快適で、質の高い生活、活力ある社会、いわゆるSociety5.0を提唱していることを前置きいたしまして、私達が掲げるテーマ、「REBORN」のもとで、健康という観点から、未来社会の新たな価値の創造に取り組むことを明記しております。また、「知る・感じる」「体験できる」「みんなで参加できる」という視点から、展示やイベントを通じまして、大阪・関西万博の3つのサブテーマ「Saving Lives (いのちを救う)」、「Empowering Lives (いのちに力を与える)」、「Connecting Lives (いのちをつなぐ)」この3つのサブテーマにアプローチするとし、次の3つの項目で整理をさせていただきました。

1つ目が、生活の質(QOL)の向上に資する新たな価値創造。文案としましては、新型コロナウイルス禍は、未解明の感染症の世界的な拡大という、未曾有の事態となり、人々の生活や社会経済への甚大な影響を私たちは経験しました。こうした経験も踏まえ、『健康』という観点から、最新の技術を活用したイノベーションによって新たな価値を創造し、最先端の医療や幸福な生き方のできる未来社会を具現化するというふうに記述させていただきました。

2つ目が、生き活きと元気に楽しく生きる提案と、いうタイトルで、国籍や言葉、暮らす場所や生き方、仕事や趣味が違っていても「生き甲斐」「やり甲斐」を感じながら、日々の暮らしを生き活きと元気に楽しく過ごしたい願望を持つこと自体は、老いも若きも同じ。「いのちに力を与える」、「いのちを繋ぐ」という視点から、自分自身を見つめ直す。自己実現欲を高める、自分らしい生き方を再認識・再発見する、そのような体験を提供するというふうに記述させていただいております。

3つ目が、サイバー空間とフィジカル空間の融合ということで、「Withコロナ」「Afterコロナ」社会が注目され、新型コロナウイルスと共に生きることを前提に、ライフスタイルそのものを大きく変えていくという動きが世界の潮流となりつつあります。「ソーシャルディスタンス」や「非接触」という考え方が、私たちの生活の様々な場面で、重要性を増しているこれからの時代に柔軟に対応していくためにも、世界中の人々がアクセスできるサイバー空間のより効果的な活用、イノベーションによって新たなエンターテインメントを創出し、IoT、ロボット、人工知能、AIなどを活用した、リアルな体験に加え、バーチャル体験など、工夫を凝らした展示を実現すると整理をさせていただきます。

次のページになりますが、こちらの方には、参考としてSociety5.0について、内閣府ホームページの抜粋の資料を添付させていただいております。なお、ただいまご説明させていただきました文案につきましては、たたき台ということで、今後も意見をいただきながらさらにブラッシュアップを重ねてまいりたいというふうに存じます。説明は以上でございます。

《西澤座長》

ありがとうございます。文章がなかなか長いですがけれども、皆様方も方向性ということでご意見をいただければと思いますが、いかがでございましょうか。

《森下委員》

出展参加で目指すもののところで、この後ろの方のテーマ展開の記載では「10歳若返り」の実現というのが入っているのですが、最初の出展参加のところではそういう「10歳若返り」ということが入ってなくて、ここにもそういう言葉を入れた方がいいのではないかなと思います。非常にキャッチーなので、何を指すのかというのが、出展の方向性のところを見た方が、より参加される企業の方々には、わかりやすいのかなというふうに思います。単純に生活の質を向上させる展示とかですね、SDGsを達成する、達成に貢献する姿を示すというのでは、ちょっとパンチが弱いかなと思いますのでぜひここにも、「10歳若返り」の話を入れたらどうかというふうに思います。

あと1つ、「大阪のパワーを世界に発信」というところで先ほどの前半の議論に関わるんですけども、大阪の強みであるライフサイエンスというところを、大阪の中小企業あるいはスタートアップ企業等の力も入れて、単純に主体がはっきりしない言葉ではなくて、こういうところの企業に参加をしてもらって、大阪のパワーと魅力を世界に発信するという形にした方が、よりわかりやすいのかなという気がしております。やはり大阪の特徴というのを出展参加で目指すところに入れた方がいいのかなという気がします。

《西澤座長》

鈴木委員、この最後の「大阪のパワーを世界に発信」というところなんか、食のことももっとダイレクトに表現したらどうかと思ったのですが、いかがですか。

《鈴木委員》

今もちょうどコロナで、世界中大変ですけど、やっぱり大阪は生活が戻ってきているっていうのを皆さんニュースで見ている、やっぱり日本だよなって。清潔でマナーもいいところプラス、大阪がすごく早かったねっていう話に少しずつ今なっていて。もちろん知事・市長が頑張っているところ。でもその頑張りが世界に届いてないのかなって私は思っていて、日本としての対策とかは割とニュースになるんですけど、もっと今大阪が結構独自のプランを展開しているのを。万博もせっかくあるので発信しつつ、改めて大阪ってどういう街なんだっけ、どうしてうまくいっている、どうして元気なんだろうみたいな部分を発信できたらいいなと。

「食のまち」は世界中で言っているんで、そこをただ言っても、「ハイハイ、万博だから言っているんでしょ」ってなってしまうと思うので、若干その客観的に見た魅力を言語化するっていうのは、今大阪にちょっと足りないかなと。繰り返しになるんですけど

ど。そこがやっぱりみんな何が魅力だっけっていうところを度々聞かれるので、それは何か言語化して早くから発信していけると、すごくいいかなっていうところと、日本がもう1回開ける前に海外に対して、大阪がある意味困り込んじゃうというか、必ず大阪行って東京行くとか、大阪行って北海道へ行くとかいうようなルートを生掛ける大チャンスだと思うので、万博に向けたその辺りの整理、発信が必要だと思います。

《シンプソン委員》

鈴木さんがおっしゃる通りですね。チャンス。うちの（大阪観光局の）理事長は最近よく言ってますよね。ピンチはチャンスですよ。まさに大阪・関西が日本のゲートウェイになるチャンスだと思うのですよね。それをぜひ万博に活かして、東京やゴールデンルートだけでなく全く新しい回路を作れたらいいなと思います。

《橋爪委員》

1回目の会議で申し上げましたが、博覧会等の展示は、入る前の意識と出た後で、入館者の思いが切り替わってなければ意味がない。要は今回、「REBORN」ということですので、入った人は誰も意識を変えてですね、なるほどそういうことだと理解して、メッセージを持ち帰る。それはライフスタイルに対する考え方が変わるとか、世の中のことにに関して、何か新しいアイデアを持つとか、大阪館で何かを得るという経験を用意する。事前知っているようなことやテレビなどの情報で既に持っているものをパビリオンの中でどれだけ展開しても何の感動もない。

そういう視点で、全体を考えていくべきだと思います。そのためには、なるほどこういうことなのかということ展示で学んだ後に、お祭り騒ぎというか、楽しい場所も必要である。いきいきと元気で楽しく生きる提案という言葉が書かれていますが、盛り上がるお祭りの場のようなものが展示の後には必要だと思います。そこで、多様な食文化の展開も可能だと思います。

1990年大阪花博に出展した大阪府のいちょう館は、金曜日の夜はディスコになっていたそうです。今このアフターコロナの状態のディスコやクラブがどんなものかはちょっとわからないですけど、要は、知的な展示の後に、何か賑わいを体感できるような、そういう場が必要だと私は思います。このいきいきと元気に楽しく生きるという部分がとても大事だと思います。

《つんくみ特別アドバイザー》

ちなみにですが、食の大阪と大阪人は言うけど、実際に大阪の売りにする「食」って何だろうと、東京に住んだり、ハワイに住むと思います。具体的に掲げ直す時期だと思います。

《鈴木委員》

まさにそこだと私も思っていて掲げ直すというか、発信をあんまりしていない。たこ焼き、お好み焼きもちろんおいしいですけど、そこだけじゃないっていうのもいい加減ちょっと発信していかないと。たぶん、つくみアドバイザーと同じだと思うのですが、そこが今こそ「人が中心であり、人がいてこそその食だ」っていうところは、大阪の特徴で強みであり、他の街が同じようにできるかっていうと、私はできないと思います。「REBORN」で言ったら、やってみなはれ精神をまさに発揮するべき時で、今、非常に大阪は飲食業も頑張っています。攻めている人は攻めているので、そのあたりも踏まえて言語化していけたらと思うので全く同感です。

《松井市長》

つくみアドバイザーにあとで聞いてもらいたいのは、東京とハワイの食の代表って何なのかなと思うとそれが一番わからない。

あと大阪はお好み焼き、たこ焼きっていうのは、店が多いのであちらこちらで、簡単に安価で食べられる。この魅力はあるけども、もちろん粉文化っていうのも大事だけど、例えば、大阪はスタンド割烹とか、全国で京都も割烹はすごく評判の良い食だと思うけど、大阪のスタンド割烹っていうのは、もう出汁文化でいうと京都よりも大阪だと思う。それから日本で一番ふぐを食べているのは、たぶん大阪だと思う。てっちりなんていうのは大阪にはおいしいところがあるし、それから海産物についても天下の台所と言われて、北海道とかで獲れるカニの良い物とかが大阪のカニ専門店に入ってくる。そこそこのお値段しますけど。

あとは「これ食べたら健康になるよと。」いうのを、繋げていけないかなと思うのですが。何かあると思う。私はずっとこの大阪館は大阪健康館とみんなに言っているんですけど、来ていただいた人が、いろいろと自分の今の体調、身体の状態、これがAIなのか何なのか、すぐそういうリスクもヘッジできて、そういうのがわかった上で、今度それをどんぶり茶碗いっぱい薬をもらうんじゃないで、食で改善していける。そういう形になっていけば、来場者の皆さんが、これからの人生を楽しむことに繋がるんじゃないかなと思います。

《鈴木委員》

私、世界一レストランとかも提案していましたが、それはそれとして、カップルとか、子どもがたくさん来なくなるような、わかりやすく、何か体験したくなる市長がおっしゃったようなものは必ず必要です。その前のスタンド割烹とか話し出したら、止まらないのでそこは割愛しますが。

やっぱり人と人が対話する、会話が成り立つカウンター越しの文化っていうのが大阪のすごく特徴で、それを海外の人に伝えると、日本語がわからなくても見ていて前のめりに皆乗り出していく。そこが京都はやっぱり「ちん」と座っているカウンターのあちら側とこちら側みたいな、京都の人に怒られるかもしれないですけど。私もやっぱり外

から来ているので、大阪に住んでみて、その距離感が楽しいですし、人に会いに大阪に来るというリピーターのきっかけづくりになるので、観光地は1回で満足しても、万博をきっかけにまた来よう、あいつに会いに来よう、みたいなことは仕掛けられるといいなと思います。

《つくくみ特別アドバイザー》

東京もあまり具体的な名物はないのかもしれませんが、北海道の海産物、九州も同じく魚や肉という鮮度が勝負ですね。

大阪のフグも山口や福岡に鮮度ではかなわないので、市長が掲げた「食の台所」として、ルートが素晴らしいという話をこのパビリオンで伝えるのか。

それよりも最近、秘密のケンミンSHOWでやっているような「紅しょうがが好き」のような話は大阪人であっても「なるほど」って思うんです。そんな食を具体的にどう掲げるか。それをみんなでしっかり、うまく商品化する。これが今回のテーマだと思っています。

《遠山委員》

ちょっと手前味噌の話はさせてもらいますけど、これは採択をするべきかという意味ではなく、今うちの傘下のがんセンターがございませうけども、2人に1人ががんになる。手術をしたり、あるいは抗がん剤、その後の食事にもものすごい困られるわけなんですね。

それに対して、このがんに対してはこういう食事、こういうレシピがいいですよというのがようやく先週まとまって、来週ぐらいにはもうホームページに載せるのですけどね。ちょっと地味という気はしますけども、そういう1つの取り組みも、片隅に入れておいていただくとか。あるいは、今の母子センターが出しているように、こういう子どもさんにはこういう料理がという本。これは3版重ねている本ですけども、大変良い取り組みをしてくれてレシピが出来上がっているのです、それをちょっとサイドメニューとして、置くというのも一つの考えというか、手前味噌な考えという気もちょっとしますが。

《高橋特別アドバイザー》

今のご意見に関連して、医療の話は食とも関係するという話の流れです。再生医療というのはちょっともう手垢のついた言葉にもなっていますし、ライフサイエンスとしての再生っていうのはたぶん日本全体でも取り上げられると思うので、もう一歩進んだ話にしたいと思います。このコロナの後、サイエンスは重要なのですが、それだけでなく社会が変わる、社会科学の方がむしろ重要になっていくと思いますので、新しい医療という切り口にして、再生医療技術だけでなく食も含めて、医療の仕組みの見直しとか社会も変えられる、それは関西発なんだということ。医療特区でもありますので、技術のみのサイエンスだけでなく社会科学面も含めることで、生活・社会へのSDGs

への広がりも示せるのではないかなと思います。

《異委員》

3ページの文読ませてもらったのですが、健康っていうところで気になったのでお話をさせていただきます。健康には主に2つあるかなというふうに思いまして、主にここに書かれているのは身体、主に身体的な健康の部分を述べられているのかなというふうに思うのですが、健康寿命であったり最先端医療であったり。

もう1つは大事な部分ですけど、心の健康っていう部分も忘れてはいけないのかなというふうに思っております。心が不健康であると活力が生まれないので、その辺やはりいろいろ全国からも、「大阪のおばちゃん元気やな」って言われるのは、なにも身体的な元気やパワーというものを指しているものではないと思いますので。心と身体的な2つのバランスを大事にしながら、健康というものを打ち出していったらどうかと思いました。

《西澤座長》

3ページの下から2番目のところで世界中からのアクセスの集積というのがございますね。この辺り、もう少しインパクトのある表現にできないのかなとちょっと感じたのですが、佐久間委員いかがですか。

《佐久間委員》

バーチャル参加というところは自分も好きで何度もご提案していたので、含まれていることは嬉しいところではあるのですが。

ただ先ほど質問した「環境は含まれるのか、あくまで人は主役ですか」と自分が変な質問をしてしまって盛り上がってしまい、やっぱり人だということの集約は本当にその通りだと個人的にも思うのですが、そういう絞り込みでいうと、このとってつけたように突然そのサイバー・フィジカル社会が、S o c i e t y 5 . 0 がという話が、この大阪館としてやっていこうって人の生まれ変わりという中で、突然サイバー・フィジカルが入ってきている。

この話は、もうちょっと医療の観点での生体ビッグデータの活用だとか、わかりやすい形で取り込んでいくのが、必要じゃないかと思っています。そのときに、このサイバーとバーチャルの使い分けがなされていない、わかっておられるのかもしれないのですが、言葉として使い分けが資料の中で曖昧なので、個人的に補足が必要かなと思っております。

サイバーという基本的にはコンピューターとかインターネットを活用してデータが集まるとか、センサを使って医療データ・生体データが集まってそれをAIとかで解析して、その結果新しい知見が得られる。そういったサイバーとフィジカルっていうのは、自分たちのこの実際にあるフィジカルなモノっていうものを、サイバー空間に取り

込めて、そしてまた新しい情報が得られて良い社会ができるサイクルみたいな話になるわけです。

サイバーと対になるのはフィジカルだと。そこでバーチャルと対になるのがリアルであって、このバーチャルは今回の文脈でいくと、手法としてのバーチャルになると思っています。そうするとリアルと対になるようなバーチャルを空間に、仮想に人工的に作った空間のようなものがあって、そこに参加ができますよという意味では、これは「バーチャル参加」だというふうになると思うのです。

ここですみ分けとしては、私達が大阪でつくる未来っていうのは、サイバーとフィジカルが融合した新しい医療のあり方とか、新しい社会を提案するというふうに言えると思うのですが、この遠隔参加というこの展示形態の中で、「サイバー空間への参加ができます」というのはちょっと違って、バーチャル空間においてもこの展開ができるというふうに言えるんじゃないかというのが補足として思っています。

最後に1つ申し上げると、この「Afterコロナ」、「Withコロナ」のソーシャルディスタンスを取らないと、という中で、ネガティブな文脈でバーチャル参加とか遠隔参加と言いがちだと思います。このネガティブな文脈じゃなくて、世界中の80億人の方が実質的なこのバーチャルな大阪館で、どういうふうに私たちが生まれ変われるのかというのを、本当に体験して帰れるような、80億人が来られますという「80億人」的なキーワードがここに立つとしたら、素敵だなと思いました。

《西澤座長》

最初の第1回からお話をずっとされていて、やはりこういったものの考え方もこのパビリオンに必要なと感じております。

《松井市長》

佐久間さんの今の話でバーチャルな部分でね、今回コロナでステイホームしているときに、家でずっと考えていたんだけど、人の生まれ変わるっていうか、人生というか、リアルな中では健康でずっと人生楽しめるっていうそういうものの入り口っていうか、そういう提供ができる館にしよう。このバーチャルなときに、誰しもが自分とは違う今の自分と違う、リアルじゃない違う人生を半年間、万博の間やれるっていうか、そういう場所にはならないのかなと。

だから、例えば子供のときこういうのになりたかったよねっていう、これは我々にもあるわけで。でも今、違う人生やっているわけよ、政治家というか。だから良いか悪いかは人生1回しかないからわからないけどね。

だから今ステイホームしている中で庭作ったりするゲームがすごい流行っているんじゃないの。何か自分が違う人になって、そういうことを世界中の人がバーチャルで半年、この半年を一生にして、何かできないかなと、私はそういうふうになんて考えていたんだけどね。リアルな人生とバーチャルな人生両方やれると。そういうのはできま

すか。

《佐久間委員》

「できます」っていうのがどういうレベルなのか、技術的な話なのかというのはわからないですけど。個人的にずっと思っていたのは、やっぱり自分たちの身体を超越するって言い方を以前はしていたんですけど、まさに市長のおっしゃる通りで、自分たちが今この身体でここにいるからこういう議論がなされているわけです。例えば、市長がなりたかった姿とか、あるいは市長でないという新しい人生でおられたときに、もしかしたら私と結構仲の良い友達になれる可能性があるわけだと。ないかもしれないですけど。そういう意味でも、全く新しい人生という形がすごくわかりやすい形で、バーチャルであれば与えられる。まず、生まれ変わった、身体が生まれ変わったということをするのは、この大阪館にしばらく滞在した中でというのは、結構難しいと思うんです。

あなたは誰なのかということが混同させられるような、技術的にはアバターに移るといことだと片付けるとすれば、それだけだと思うんですけど。そういう中で、自分が誰かだったらとバーチャルで感じる、自分が生まれ変わるそのきっかけになったり、特に先ほどお話があった精神的な「REBORN」というところも含めてくると、結構すごく可能性があるところだなというふうに感じております。

ただ質問の答えになっているかどうか。いかがでしょうか。できると思います。

《松井市長》

何て言うかな、人生ゲームみたいなもので全員参加できる、参加したら、いきなり生まれるとかね、生まれるのも卵から生まれるか、何でもいいけどそれで自分でウロウロしながらいろんな知識を吸収しながら、だいたい半年間でこれ（万博）が終わるときに一生が終わるようなタイムスケジュールにして、結局バーチャルのときには自分は何になれたりとか。いろいろな職業もあるし、アーティストとかそういうのもあるし、だからそういうことを5年後にね、そういうことをやれる。

世界中の人が、そういうネットの前に自分で座って、自分のエンターテイメントをやりたい人は自分の家で何か歌っていたらそれを審査してもらえて、歌手になれたとか、なんかそういうのを面白いと思うんだけどね、やれますか。

《佐久間委員》

はい。そういう現象としては、既にあると思っていて、バーチャルY o u T u b e rということで、前々回ぐらいにお話していたと思うんですけども。そういう中ですごくヒットしている女の子とかって、実は普段は普通に中学校に通っている女の子とかが、そのアバター越し、つまり誰かじゃない誰かになることによって、世に触れる機会ができたということが起きているのは間違いなくて。そういったこの限られた人が使うアバターみたいな話を、今回のような身体を得て、そして生まれ変わった人生ゲームをし

て、という話に持ち込めるのかどうかというところが、技術検証なりが必要で、あるいは80億人が参加するとなるとVRとかは多分使えないんですよね。インターネット、プラス、ブラウザがギリギリであるかどうかだと、80億人だったら思いますけど。先進国の方相手にするならVRという話もできますし、そのあたりのすみ分けをしながら、人が生まれ変わるというのを世界に対してどう発信するかという中に、この人生ゲームの話が入るのはすごく大切だし、できると思いますし、したいと、個人的にも思います。

《つんく♯特別アドバイザー》

あつもり（※あつまれ どうぶつの森）かな？

ただ、それがこの大阪万博でやる意義をどう掲げるかだよね。そういう意味でも、80億国民の「大阪国誕生！」って言いたいよね。「REBORN王国」でもいいし。

《西澤委員》

はい。ありがとうございます。

前からおっしゃっていたREBORN王国ですね。

《橋爪委員》

「バーチャル・リアル」と「サイバー・フィジカル」の使い分けはきっちりやらないといけないと。リアルな会場にリモートでアクセスするとか、ARでバーチャルな体験が現場でできるっていうのが「バーチャル・リアル」である。対して「サイバー・フィジカル」というのは、別にサイバー空間を設けたうえで、フィジカルな空間との融合をはかる。博覧会全体でも、サイバーの会場を作ってという話が出ているので、その関係性を我々は考えないといけない。市長が他の職業に就ければというのは、今だいぶしんどい状況にいてはるのかなと思いますが、今もそんなゲームはいろいろとあるので、万博でやらないとあかんことなのかどうか。2025年で魅力的なサイバー・フィジカル融合とは何かという議論をしないと、今、すでにゲームでできる話であれば、5年後には5年遅れになる。そこはよく考えていかないといけないと思います。

《東委員》

今回の件、私も大阪の話は、昔エストニアの話をしたことがあります。仮想市民、国民という考え方は成り立っています。今回、新しい生活様式ってピンとこない。新常态の方がいいと思うのですが。加えて「Afterコロナ」よりは「Postコロナ」の話の方がしっくりくると思っています。Before、Afterって元に戻っているような捉え方をされがちなので。ポストコロナのときの展示がどうなるかというといったときに、今まさにサイバー・フィジカルがほぼ融合しているというような感覚になっていて、その次のことをどう考えるかっていう話をしだしているんですね。

ある種、ネットワーク空間的な言葉がでてきているのですが、東京にいて、よく大阪

のニュースを聞きます。社会経済がデュアルモードでうまく運用されている、安心と健康を優先するモードに経済活動を優先するモードにシフトする、落ち着くと逆に経済活動モードにシフトする、この切替えがすごいスムーズに行っているというのが、今、大阪で。世界は今この切り替えが1番苦労されているわけですね。それぞれのモードを行ったり来たりしていると。東京でもそうですけど。その中で常にいち早く新常态を作りつつ、ある種安心できるような環境を作ってきたのが大阪です。その中で改めて、東京だったら狭い家にずっと引きこもっていて、先ほどの心の健康の話じゃないですけども、本当にそれで幸せかと。今までだったら、QOLだ、経済指標だと、言ってきましたけれども、いざ緊急事態宣言が出され移動制限されると、心が病むとか、地方に行きたいみたいな若者が多くでてきている状態になっております。

やはり橋爪先生がおっしゃった、パビリオンに来た後では、価値観が変わっているとか、少し考え方が変わるとか、物の見方が変わるとか、というような展示をするのであれば、やはり世界から大阪に来たときに、今結構、二都市居住、多都市居住とかという話が出てきていますが、もう少しメタ的な発想で、1回大阪に来たら、大阪に一生何かしら関わりたいと、そして1つ大阪のIDを持ちたいというような考え方になるような、展示がいいのかなと。

市長がさっきおっしゃっていた、「何かになりたい」というところに近いですが、1回大阪人になってみたいなど、一生大阪と係りたいなどというような展示を、展示に入っただけでも作れるのであれば、1つの大きな成功かなと思います。

《つんく♂特別アドバイザー》

今日の会議のテーマや意義、目指すべきことの文を読みましたが、これをどう小学生や中学生、主婦たちの興味に向けておくのかな。って思いました。

疑似空間も、フォートナイトに息子は夢中やけど、娘たちはスライムの方が楽しいようです。大阪人としての「どや！」というのを早めに掲げたく思いました。

《西澤委員》

そろそろディスカッションを終了したいと思います。大分話が詰まったかなと。この辺りは、事務局でまとめ直していただければと思います。

それでは、3に入りたいと思います。3その他の項目についての意見交換ということでございます。

《事務局（展示・催事の基本的考え方についての説明）》

その他の項目ですが、会議の冒頭でも触れました。検討の論点に記載の出展内容以降の項目および、出展参加基本構想たたき台の目次にあります5、6、7の項目に関する事項について、事務局の考え方を説明させていただきますのでよろしくお願いいたします。

まず展示催事の基本的な考え方についてであります。大阪・関西万博は「誰一人取り残さない」という理念を掲げておきまして、SDGsの理念もそういうことなんです。地元パビリオンにおきまして、子供からお年寄りまで楽しんでいただけるコンテンツや、展示の工夫を行ってまいりたいと存じます。このため、今後、一般のニーズ調査等によりあらゆる層の関心時を把握いたしましてパビリオンの内容に生かしてまいりたいというふうを考えております。ここにイメージ図を書かしていただいておりますが、今後、府内府外、いろんな層のニーズ調査っていうのもやっていく必要があるというふうを考えております。

次に、出展のスキームといたしまして、産学官が結集したオール大阪での出展参加の体制を構築していきたいというふうなイメージをしております。

今年度は府市におきまして出展参加基本構想を策定いたしますが、来年度は構想の内容をさらに具体化する出展参加基本計画の策定作業を進めていく予定であります。

計画の策定に当たりましては、イメージ図で示しておりますように、このような実行組織を立ち上げることを想定しておきまして、構成団体についても、現段階での事務局のイメージとして記載をさせていただいておりますが、この他にも関わっていただく団体等についてあると思いますので、委員の皆様からご意見をいただければというふうに存じます。

また、今後、国際博覧会協会におきましても、総合プロデューサー等を置かれるというふうには伺っておりますけれども、地元パビリオンの具体化を検討していく中でもですね、来年度になります。実行組織のもとに、総合プロデューサーを置いてそれぞれの専門の建築デザイナーであったり、展示・空間デザイナー、イベントディレクター、フードイベントコーディネーターなどを配置して、計画段階から関わっていただくイメージを描いております。そうしたプロデューサー等の人選方法や、若手人材の起用のあり方も含めまして、実行組織の構成団体で議論しながら検討を進めていくというふうを考えております。

そうした体制を整えて、来年度は基本計画を策定していくというイメージをもちます。その上で、2022年度には、パビリオンの建築設計、展示の基本設計。2023年度には、パビリオンの建築工事、展示物の制作に着手するといったスケジュール感で進めていくというふうに想定をいたしております。

最後になりますが、展示催事の構成につきまして、前回の会合でも、展示体験ゾーンとイベント交流ゾーン、サービス・食体験ゾーンの3つをお示ししておりましたが、これまでも委員の皆様からご提案をいただいております。バーチャル空間での展示イベントというものは、Withコロナ、Afterコロナに鑑み、実現すべきではないかという意見もいただいておりますので、あえてそういったバーチャル空間というものを打ち出すような図示をさせていただいております。

先ほど佐久間委員の方からも、バーチャル空間をどういう形で実現できるのかというところが、ご意見ありましたけれども、リアルで見せる体験ゾーン、3つのゾーンに

加えまして、そういうバーチャルでの体験っていうのも、こういう空間で見せていく必要があるのかなど。市長がおっしゃっておられたような体験もこのバーチャル空間でできるようなイメージ、そういうものを持っております。

もう1つは、食に関してなんですが、前回の会合で鈴木委員より提案のありました、世界のトップシェフやトップソムリエなどが結集するレストラン。あるいは食とアートや医療が体験できる空間などにつきましては、地元のパビリオンでの実現というより、万博会場全体で実施すべきとのご意見もございましたので、そのような整理をさせていただいております。今後、国際博覧会協会で検討していただけるのかどうかわかりませんが、そうしていただけるよう提案していくといった整理をさせていただいております。

以上ご説明させていただきました事項につきましては、委員の皆様より今後ご意見をいただいた上で、構想のたたき台の目次項目の5以降の文案を整理いたしまして、次回の会合でお示しさせていただきたいというふうに考えておりますので、よろしくお願ひしたいと思います。

事務局からの説明は以上でございます。

《森下委員》

1番最初の「展示・催事の基本的考え方について」というところで、この縦の若者層、シニア層、子育て世帯って、これはアンケートの対象者を書いているのですか、何をイメージされているのですか。

《事務局》

これにつきましては、アンケートの「層」、対象とその属性、そういうのをイメージしまして、考えていますが、一応年齢層で幅広く、大阪府内・府外にお住まいの方、外国人の方も含めて、いろんなアンケートをしたいなというふうに考えております。

《森下委員》

そうすると、ものづくり・IT企業があるのだけど医療関係者の方にはヘルスケア関連企業がなかったりとか、ちょっと何か違和感があります。

《事務局》

そこがわかりにくいのですが、一般の方々に対しては、やはり万博へ来て大阪のパビリオンでどんなものが見たいか、体験したいという生の声を聞く。あるいは事業者の方々に対しては、2025年の大阪・関西万博で我々がテーマとするものに対してどんなものを見せたいか、示したいかというのも、これから調査していく必要があるかなというふうに、その2通り考えております。

《森下委員》

そういう観点であれば、やっぱり医療関係事業者のところにヘルスケア関連企業を、それからあとやっぱりスタートアップ系の企業のお話もかなり聞いた方がいいと思うんです。

今、新しいサービス形態ができていて、大阪でも渋滞解消で駐車場を有効活用する方法とか提案されている企業もあるので、そういうところのお話を聞くと、かなり面白い企画が出るのじゃないかと思うので、少し従来型の企業じゃない、新しいタイプの企業さんにもぜひヒアリングしてもらえればと。

《つんく♫特別アドバイザー》

バーチャル空間とイベントゾーンが別になっているけど、繋がっていないと、後々困ると思います。

《澤田委員》

「若手人材を起用」のところですが、若手は重要だと思いますけども、この事の趣旨は、次の社会を担う人たちに十分な経験を積んで担っていただくということだと思います。それと「年齢」のこともあるのですが、今のこの時代は「性別」、それから、もしかしたらシン普森委員がいらっしゃいますが、「国籍」そういうものも含めてどういう人に参加してもらうべきかという、趣旨から一度議論をしないと、何か若ければいいみたいな話になってくると思います。また、年齢をどこで切るのかっていうのは意外と重要な気がしていて、私は1982年に着目していて、インターネットプロトコルができ、日本ではNECのPC98の初号機が出た年です。そのときに小学校1年生だった人は1975年生まれで、万博のときにはちょうど50歳なので、そのあたり以下ぐらいにしておいた方がいいのではないかと。今のデジタルを担う世代みたいなことで切らないといろんな議論が出てくるので、このような基準を明示する。ただ、生物学的な年齢で切ることでもまた差別に繋がるので、そのことも含めてどういう意図で、どういう基準を持つのか「それはあくまでも一つの基準です」と言いつつ、何か持たないと、皆さん考えにくいのではないかと気がしましたので、その辺も事務局の方で少し考察いただければありがたいなと思います。

《橋爪委員》

何点か申し上げます。1点目、産官学が結集とありますが、ここで市民が置いていかれているので、たとえば産官学民といった記載にすべきだと思います。

あと「パビリオンを具現化する実行部隊」、この「部隊」というのはどうも戦っているようなので、もうちょっと違う言葉があるのかと。この「若手人材を起用」というのも、例えば1970年大阪万博のシンボルゾーンの計画では、70歳代の委員会が50歳代の丹下健三先生や岡本太郎先生を登用、その下に30代、40代の専門家が活躍した。要

はどういう若手を登用するのかというシニアの目利きの人が必要なんですね。若かったらいいってものではないと。あとその若手人材の中に、私としては、大阪ゆかりの人を登用していただきたい。万博で仕事をして、あとあと大阪を拠点として頑張るような人に頑張って欲しい。大阪を背負う次世代の人たちが、大阪館の現場から生まれれば、ということをお願いしてきてきたつもりです。

あとバーチャル空間に関する記述が、先ほど申し上げたように「サイバー・フィジカル」と「バーチャル・リアル」の使い方をきっちり区分すべき。ここはもう一度整理をしていただきたい。バーチャル空間とサイバー空間が同じ枠の中にあるっていうこと自体が、少し違うのだろうと思います。以上です。

《武田経済産業省商務・サービスグループ博覧会推進室長》

経済産業省の武田でございます。

「REBORN」かっこいいですね。前回参加できなかったのですが、ここまで議論が進展してですね、毎回、参加させていただく度に思うのですが、日本館の検討を始めるにあたって、非常に、いつもこの府市パビリオンの議論の先行にいい刺激を受けています。「府市パビリオンの方はエッジのきいた焦点を絞る」一方、「政府館の方に、テーマを広げるのは任せる」というような話もあったということで、いい意味でのプレッシャーを感じながら、SDGs17の目標と169のターゲットに加えて、プラス beyond と、これをどう日本館でまとめていくかというのがなかなか課題なのですけれども、頑張っていきたいと思います。良い切磋琢磨ができることを期待しています。

《つんく♂特別アドバイザー》

「大阪人」として全て展示物を（医療や食、技術も含めて）「エンタメ」と考えて、この万博にどう落とししていくのか。バラバラにならないようにしていかないと、この4ページ目の考え方はかなり最終的に落とし込んでいく人たちの役割分（分担？）の表に見えるので、ちょっと考えが狭い気がしました。

《高橋特別アドバイザー》

今まで、参加できずに残念だったなと。まずは様子を黙って聞いていようと思ったのですが、思わず皆さんが盛り上がるので、ついつい、意見を言いましたけれども。これからも楽しいものになっていくと思います。

《松井市長》

これよく考えたら、バーチャル空間って別にリアルな大阪館できなくても、できるんやろうね。だからバーチャル空間を先に作ってもいいんじゃないかなと。

バーチャル空間を先にプレオープンしてやね。

そして、リアルな大阪館おそらく健康館をオープンすると。その形で、バーチャル空

間やりながら世界からいろんな声聞こえてきたら、それに合わせてまたリアルなところにどう取り組んでいけるかというふうに、今すごく感じてね。バーチャル空間やから、1カ月後にオープンしてもいいのかなと。万博に向けてプレオープンで。大阪館がバーチャルで。それもやりながら、情報収集としてすごい面白いなあと、今そう思ったんで。

佐久間くん、いろいろと事務方と打ち合わせしてね。どのくらいお金かかって、どうしようとかね。そこが1番情報収集になるかもしれない。

リアルなところに、その意見がどんどん入れ込んできたら面白いなあと、こう思いました。

《吉村知事》

私も生まれ変わりというか、なんていうんですか「アバター」ですか。

それを作って別の人生の自分ができるって面白いなと思っていて、先に始めるなら先に始めて、大阪パビリオンで自分とその人が会えたら、面白いじゃないですか。その館の中で、例えば自分2人みたいになるじゃないですか。

大阪に来ようという気になるし。6ヶ月で終わらせるという話ですが、そこでずっと、自分と別の人、人物がバーチャルで生き続けるというのは、レガシーみたいなものもあるんじゃないかなと。それは大阪王国、REBORN王国になるかどうかわからないのですけど、そういう枠を超えたら、面白いかもしれないですよ。

佐久間さんそういう形で、よろしく願いいたします。

《西澤委員》>

ありがとうございます。以上で終わりたいと思いますけれども、本日は「出展参加テーマをREBORNに決定した。」ということと、それから出展基本構想たたき台についても議論いただいたということでございます。

各委員からいただきました意見を参考にしながら、今後改めて事務局で整理をさせていただいて、次回の会合で、内容、方向性を固めていければと思っております。

委員の皆様、また、つくくみ特別アドバイザー、高橋特別アドバイザーには、引き続きいろいろな観点からアドバイスをよろしくお願い申し上げたいと思います。

なお次回の開催につきましては、改めて日程調整の上ご連絡させていただきたいと思っております。どうぞよろしくお願い申し上げます。

本日の議事につきましては、以上で終了させていただきたいと思っております。どうもありがとうございました。